

留学生・日本人大学生混成クラスの ディスカッションにおける相互行為

杉原 由美

1. はじめに

1990年代以降、従来は留学生のみを対象としてきた日本事情教育の分野で、日本人学生も対象として加えた実践が試みられるようになった。足立他(2000)によると、このような混成クラス¹は、留学生と日本人学生の参加の形式が同じで、継続的、体験的な学習形式という3つの形式的特徴を持つ。つまり、日本人学生がボランティアとして加わったり留学生がゲストとして参加するのではなく、参加者には一律に単位が認められ、単発的なイベントではなく長期にわたり、また講義形式ではない授業を指す。授業の目的は個々に異なるが、多くは日本人学生と留学生が合同の活動の中で意味のあるやり取りを行って、互いの言語運用能力や相互理解を促進させようという試みである。

この混成クラスを対象とした研究としては、授業参加後の参加者の意識を分析したものや実践報告が多く、現場で起こっている現象を省みる視点での研究が必要と考えられる。本研究では、河野(1999)と杉原(2003)が目にした相互行為上に現れる参加者間の関係性に焦点化し、混成クラスの現場の実証的な研究の結果を報告する。

2. 先行研究と研究目的

河野(1999)は、日本語ボランティア活動の会話を分析した論文で、大学などの日本事情教育で行われている混成クラスについて考察を行った。そして、混成クラスにおいては、ことさら「異文化間コミュニケーション」として「〇〇人、××人」というものの見方が強調される結果、参加者は「〇〇人、××人」という関係性で固定化してしまい、「国籍を超えた相互理解」「自文化中心主義からの脱却」などの目的からむしろ遠ざかる可能性があるのではないかと、疑問を投げかけた。

杉原(2003)では、この河野の問題意識を受けて、

「地域住民」を対象とした混成クラス²のディスカッション場面に現れる参加者の関係性について会話分析を行った。その結果の一部として、「日本人/外国人」という二項対立的なカテゴリー対が「〇〇人、××人」の上位カテゴリーとなり、相互行為上に支配的に現れて、権力作用をも引き起こすという問題状況を明らかにした。そして、「日本人/外国人」カテゴリー対を導く要因として、定型化された発話パターンを特定し、注意を喚起した。

では、これらの現象は、大学生対象の混成クラスでも見られるのだろうか。本研究では、大学の半年間の授業として行われた混成クラスのディスカッションを対象として、教師が話題を提起したディスカッションやプロジェクトワークを行うという中で、どのような関係性がどのように現れるのか、相互行為における参加者の関係性に関して分析を行い、特に「日本人/外国人」のカテゴリー化に関する分析結果に焦点を当てて記述する。研究課題は、留学生と日本人大学生の混成クラスにおけるグループディスカッションにおいて、①参加者はどのようなカテゴリーで関係性を形成しているのか。②「日本人/外国人」カテゴリー化が生じているとすれば、それに関わる要因は何か、の2点とする。

3. 研究方法

会話における参加者間の関係性を分析するために、本研究ではエスノメソドロジーの会話分析の方法で、カテゴリー化実践という観点から分析を行う。具体的には、Sacks(1995)の「成員カテゴリー化装置(membership categorization device)」とSacks他(1978)の「会話の順番取得装置(turn-taking system)」を用い、Schegloff(1991)の制度的状況(Institutional setting)の会話を分析する方法に従って、フィールドで見られるプロセスをできる限り広くカバーできるようなキー概念を探す。

研究対象は、某女子大学で 2002 年度に行われた留学生・日本人大学生混成クラスにおけるグループディスカッションである。授業は週 1 回 90 分で、参加者は約 28 名（うち留学生 16 名・国籍 10 カ国、日本人学生 12 名）であった。半年間で 12 回の授業が行われ、前半 6 回は教師のテーマ提起の下でのグループディスカッション（4.5 名ずつ、前週資料配布）、後半 6 回はグループでアンケートやインタビュー、文献調査などのプロジェクトワークを行って発表し、個人レポートを提出するというものであった。本研究では、10 グループ分の録音・録画の文字化資料をデータとした。

4. 分析結果

4.1. 課題 1「参加者はどのようなカテゴリーで関係性を形成しているのか」

分析は、成員カテゴリー化装置に従って何者として発話しているのかを各発話ごとに同定した。その結果、本研究対象の 10 事例においては、4 事例で「日本人／外国人」というカテゴリー対が初めから最後まで発話内容と会話の順番取得装置に一貫して現れ、4 事例では発話の約 1/3～1/2 に「日本人／外国人」というカテゴリー化が見られたものの、「性別」等他のカテゴリー集合に転換していた。また、アンケートを作成するというプロジェクトワーク中の 2 事例では、発話内容にはほとんど現れないが、会話の順番取得装置に「日本人／外国人」というカテゴリー対が一貫して現れていた。総合すると、10 事例のうち 6 事例に「日本人／外国人」というカテゴリー対が現れ、一貫して支配的なカテゴリーとなっていた。

4.2. 課題 2「『日本人／外国人』カテゴリー化に関わる要因は何か」

本研究の事例では、「話し合う内容の方向性や枠組み」について発言するという行為をめぐって、「日本人／外国人」というカテゴリー化が顕在化するという特徴が見られた。具体的には「ディスカッション冒頭で口火を切って、話し合いの方向性を決定する」「話の展開が停滞気味になると新しい話題を提示する」「ディスカッション終了を確認しあう」という行為を「日本人」が担うという特徴が見られたのである。言い換えれば、ある特定の領域について、「外国人」が発話をせず「日本人」のみが

発話することによって、相互達成的に「日本人／外国人」というカテゴリー化が起こっていたといえる。以下で、ディスカッション冒頭場面を取り上げ、参加者が「何者として発話しているか」に注目した分析を具体的に説明する。

会話例 1 (J1,J2,F1,F2 の 4 名参加。)

01#:あー
 02#:うーん
 03#:さて。どうしよう……
 04J1: じゃあ、最初から{笑い}しましょう。
 [携帯電話 {笑い}資料を見ながら]
 05J2: [携帯電話{笑い}]
 06J1: 携帯電話はどのように利用していますか?……
 うーん……なんかーちょっと分からないことがあつたりしたらー、すぐメールとかー。なんかー、なんだろう、ほんとにちょっとしたことでも、携帯を使ってるかなーとか……
 07F2: あの、私は、うまく言えなかったり、日本では携帯でメール送ったりしますが、韓国では大体なんか、友達とけんかした後に、{「携帯電話で謝る」という話を省略する}
 あれはほんとに便利だけど、{笑い}なんか、うん、けんかする時にはやっぱり、会って。
 08F1: そうですね。感情を現すためにも、
 09#:うん
 10F1: なんか、えっとーえっと友人としてあなたはいい友達ということも、###……{笑い}
 11J2: なんか、私はコミュニケーションの下手な日本人なので、電話より通話よりはメールの方を{続く}

まず、始まりの合図がなく場が混沌としている中、発話 04 で J1 が口火をきり「最初からしましょう」とディスカッションの方向性を決める発言をした。発話 05 で J2 も発言を重ねている。そして、発話 06 で「携帯電話はどのように利用していますか」と方向性が具体的に明示され、発話 07 で F2 が「あの、私は」と自分の状況について発言して「日本」と「韓国」という場所が現れた。そして、発話 11「私は…日本人なので」に至って、J2 によって「日本人」というカテゴリーが明示された。この後、F2「日本人の友達は忙しいので…」、F1「インドネシアなら」、J2「皆さんの国では…」とカテゴリー化を含んだ発話が続き、「日本人／外国人」というカテゴリー対が顕在化していった。

つまり、話題が確定した後、「日本」「韓国」という伏線を受けて「日本人」カテゴリーが現れた。それに対して「インドネシア」という「〇〇人」カテ

ゴリーが現れ、「皆さんの国」という発言によって「日本人／外国人」という対比されるカテゴリー対が形成されたといえる。では、「日本」や「韓国」などの発話が見れる以前の発話 04 から 06 にかけては、参加者は何者として発話しているのだろうか。この部分は、発話内容からはカテゴリー化装置は特定できないが、会話の順番取得装置に顕著な特徴がある。それは、J1 が口火を切っていること、そして話し合いの方向性を決めるための話題提示を J1、J2 が行っているという特徴である。実は、本研究の事例ではディスカッション冒頭がデータとして存在する 8 事例のうち、7 事例に同じような現象が見られた。順番取得装置は、発話順番の権利と義務を適切に配分するポリティックスに関わり、当該制度状況の規範的な道徳的秩序がどのように達成されているかに関わる。つまり、今起こっている行為の枠組みを決定し展開を方向付ける行動が「日本人」によって担われるという規範的な道徳的秩序が存在し、発話 04～06 においても既に「日本人／外国人」というカテゴリー化が進行中と考えられる。

5. 考察

本研究の事例では、話し合いの方向性や枠組みの決定、および話し合いが停滞した場合に新しい話題を提起する行為は「日本人」が担うものという規範的な道徳的秩序があり、実際に相互行為の中でその秩序が履行されることによって「日本人／外国人」というカテゴリー化がおこっていた。

では、なぜ、「日本人」が話し合いの方向性を決めたり、話し合いが停滞すると新しい話題を提示するのだろうか。この現象を考察するためには「hidden agenda」という概念が参考になる。この概念は、エスノメソドロジーの制度的状況での「専門家」と「素人」の間での相互行為を分析する際にしばしば用いられる相互行為の実質的内容や方向づけについての事前の取り決めである。ここでは、秋葉（2004）を参考に「hidden agenda」を「隠れた進行表」と表現し、「やりとりが隠れた進行表どおりに進まない状況の中で、参加者 A が参加者 B の発言を阻んでまで進行表どおりに進行させる」場面に注目したい。

会話例 2 (J3, J4, F3, F4 の 4 名参加。アンケートの選択肢についての話。発話 01 「イ」は選択肢の番号を表している)

01 F3:	みんな一か、みんなイー	[イを選択しなかった
02 #:		[うん
03 F3:	人も、これを見る一のは、めんどくさいから、ここに、矢印を書いて	[うん
04 J3:		[た方が見やすいんじゃないか[ってことですか。
05 F3:	うんそうそう。	
06 J3:	どーだろ。	
07 J4:	もうそこら辺はあの M 先生に、見せて、聞いたほうがいいと思います。	
08 F3:	んー。	
09 J4:	あんまりそういう形式のアンケート私見たことないです、て、	
10 F3:	ふふ{笑い}	
11 J3:	どーだろ。一応[んー	
12 F4:		[あああ、あもう一度、これもちよつと一あーあの一例えば育児休暇を・・・{続く}

発話 01、03 では、アンケートのとある質問項目で、選択肢「イ」を選んだ人だけが続く一連の質問に答えるという部分について、「イ」を選ばずに続く質問に答える必要のない回答者には、矢印で次に答えるべき質問項目へと導く方法を F3 が提案している。その提案に対して、発話 04 で J3 は「ってことですか」と F3 の発言を確認し、発話 06 では「どーだろ」と態度保留、発話 07 では J4 が「M 先生に聞いたほうがいい」と教師を基準にして「クラスの枠」に照らして合わないことを暗に示した。このように賛成しないことを示しても、発話 08 で「んー」と退く様子のない F3 に対して、J4 は発話 09 「そういう形式のアンケート私見たことないです」と述べた。すると F3 は発話 10 「ふふ」と戸惑った笑いをし、F4 は一連の話題が終結したもののみなして発話 12 で全く新しい話題を始めた。

発話 09 が F3 と F4 にとって議論打ち止めの決定打になるのは、「J4 が見たことがない」ということが大きな意味を持っているからである。つまり、ここで 4 人の参加者が作っているアンケートは、暗黙のうちに日本のやり方を基準としていることになる。言い換えれば、「日本のやり方」という隠れた進行表に沿った形でアンケート作成のやりとりが行われているが、会話例 2 の場面で行進表どおりに進まない状況が出現したために J3, J4 は F3 の意見を退けて、アンケート作成自体を進行表どおりに進ませるように働いたのである。そして、F3 にとっては隠れた進行表がみえず、非対称的な関係性の中で従属的な立場に置かれる結果となっている。

以上、元来「専門家」と「素人」という縦の関係に用いられる概念を用いて考察し、この事例では「日本人」「外国人」が横の関係ではなく、非対称な縦の関係になっていることを示した。「日本のやり方」は実態はなく、「日本人」カテゴリーにいる者がその都度決めるあいまいなものといえる。そして、隠れた進行表はアンケートの選択肢の決定という細かい作業に顕在化しているが、そもそも話し合いの枠組みを決定する役割を無意識的に「日本人」が担うことを通して知らず知らずの間に形成されるものである。「日本人」が話し合いの枠組みを決定するということは、単なる役割関係には留まらず、一方が従属した非対称的な関係性を導くものである。

6. まとめ

本研究では、大学の半年間の授業として行われた混成クラスを対象として、教師が話題を提起したディスカッションやプロジェクトワークを行うという中で、どのような関係性がどのように現れるのか、相互行為における参加者の関係性に関して分析を行い、特に「日本人/外国人」のカテゴリー化に関する分析結果に焦点を当てて記述した。その結果、「話し合う内容の方向性や枠組み」についての発言を「日本人」が行うことによって「日本人/外国人」カテゴリー化が顕在化する現象、日本のやり方が「隠れた進行表」となり「日本人/外国人」カテゴリー対は非対称な関係性となる現象の2点が特徴として明らかになった。

混成クラスのディスカッションにおいて、「話し合う内容の方向性や枠組み」について「日本人」がなぜか発言してしまうこと、「外国人」がなぜか発言を控えてしまうことは一見当たり前の現象にも見える。しかし、無意識的に非対称な関係性を形成し強化している仕組みなのである。エスノメソドロジーの視点は、アプリオリな道徳的・規範的含蓄をあぶりだすという。文化的言語的多数派である「日本

人」、文化的言語的少数派である「外国人」とも、この道徳的規範的含蓄を捉えなおし、再考する必要がある。

文字化資料の記号

、	区切りまたはごく短い沈黙
・	1つが約1拍の沈黙
—	伸ばした音
[発話の重なり。重なった発話は
[[の並びを上下でそろえる。
#	発話者及び発話内容不明
。	文末の下降イントネーション
?	文末の上昇イントネーション
{ }	非言語行動や特記事項

注

1. 「混成クラス」の他に、「多文化クラス」、「合同クラス」などと呼ばれている。
2. 研究対象は、同じ地域に生活する日本籍住民と外国籍住民が多文化共生を目的に互いに問題を提起し継続的に対話を行う「多文化間対話活動」である。

参考文献

- 秋葉昌樹 (2004) 『教育の臨床エスノメソドロジー研究』東洋館出版社
- 足立祐子、押谷祐子、土屋千尋 (2000) 「コミュニケーション体験の場としての多文化クラス」『第12回日本教育連絡会議発表論集』
- 河野理恵 (1999) 「『異文化コミュニケーション』としての『日本事情』—エスノメソドロジーからの示唆」『21世紀の「日本事情」創刊号』くろしお出版 40-53.
- 杉原由美 (2003) 「地域の多文化間対話活動における参加者のカテゴリー化実践—エスノメソドロジーの視点から」『世界の日本語教育 13号』1-18.
- Sacks, H., Schegloff, E. A., Jefferson, G. (1978) *Studies in the Organization of Conversational Interaction*, Academic Press
- Sacks, H. (Edited by Jefferson, G. with an introduction by E. Schegloff) (1995) *Lectures on Conversation Vol. I & II*, Oxford: Blackwell
- Schegloff, E. A. (1991) *Reflections on talk and social structure*. In D. Boden, D. H. Zimmerman (Eds.), *Talk and Social structure*: 40-70. Cambridge, UK: Polity Press

すぎはら ゆみ/お茶の水女子大学大学院 COE 研究員
sugihara@ocha.ac.jp

本研究は、平成14年度科学研究費補助金基盤研究B「多言語多文化社会を切り開く日本語教育と教員養成に関する研究」(代表: 岡崎眸、課題番号: 14380117) によって収集したデータの一部を対象にしており、平成17年度科学研究費補助金若手研究B「日本語教育における日本語母語話者・非母語話者混成クラスの相互行為に関する研究」(代表: 杉原由美、課題番号: 17720122) によってデータを資料化・分析したものの一部である。